

7月学習会の案内 第53回「資本論を読む会」

DAS KAPITAL

日時 7月24日(月曜日)

午後6時30分 Zoomで開催
次回は「第7篇 資本の蓄積過程 第21章 単純再生産」
[岩波文庫(三)p99-122]

さて!いよいよ次回から第7編「資本の蓄積過程」に入ります。6月の「読む会」は「第20章 労働賃金の国民的差異」をやってから、残り時間を使って「生産的労働」について考える時間を取りました。

世界市場の中で労働賃金を考えてみようというテーマは、春闘議論で日本の国際的賃金水準の低さが指摘されている中では、「扱いやすい」「面白い」議論になるとの向きもありましたが、世界市場と言

ったって、世界的に現在のような為替管理制度も発展していない中での議論ですから…チョット言い訳がましいですが、チンプンカンプン?!?!。マルクスの言い方も、あの難解な表現が再現し、おまけにレポーターが「これを更に難しく解釈・説明していた」(?)ようにも思えました。ともかく分からないことは…宿題!宿題!ということに…。

「生産的労働」云々の話は「公務員の労働は生産的労働か?」「搾取はあるのか?」という念願のテーマに挑む問題提起で(二人のTさんからレポートあり)、面白かったですがチョットの時間では終わりません。支局ホームページにレポートが残されていますから、必要に応じて何度も議論しましょうということで終わらせました。皆さんも是非参考にしてくださいネ。

懇親会は、いつも通りに多方面-ロシア・ブルゴジンの乱、LGBTQ問題など楽しく過ごしました。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coccan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから Takちゃん

第二十章 労働賃金の国民的差異

第15章では、労働の価格と剰余価値の変動を引き起こす、種々の組み合わせを取り扱った。労働力の価格が実現される生活手段の量は、この労働力の価格の変動とは独立した異なる運動をする。異なる諸国の国民的労働賃金は常に差異がある。その比較には、労働力価値の変動を規定するあらゆる要因が考量されなければならない。

各国には一定の中位の労働強度があり、一国内では平均以上に高い強度のみが価値の秤量に変更を加える。世界市場ではこれと異なる。諸国の異なる「中位の労働強度」は階梯をなし、その平均を尺度とするので、強度の大きい国民的労働は小さい国民的労働より、同一時間により多くの価値・貨幣を生産する。

この世界市場で、労働強度によらずに価値法則により以上の修正を加えるのは、生産手段の相違でのより生産的な国民的労働である。高い労働生産性の国民的労働は、より労働強度の大きい労働として計算される。

資本主義的生産が発展している国ほど、国民的な労働強度も労働の生産性も、国際的水準より高い。だから同一商品は同一の労働時間に、異なる数量が生産され、不等な国際的価値・貨幣額となる。

諸国家の貨幣の相対的価値は、発展している国は未発展の国より小さい・少ない。

ゆえに、貨幣表現した名目的賃金は発展した国の方が、未発展の国より高い。

しかしこれは、実質賃金・購入できる生活手段にも当てはまるということを意味しない。

以上のような諸国家の貨幣価値の相対的差異は別として、日賃金・週賃金等は発展した国では未発展の国より高いが、剰余価値や生産物価値と比較した相対的労働価格は、未発展の国の方が高いことは、しばしば見られる。